研究の成果

研究項目　　豊かな心とたくましい体をもち、生涯にわたって自ら学び続ける生徒の育成
～命を大切にできる子どもを育む道徳教育の在り方～

大口町立大口中学校

１　研究の概要

本校では、「豊かな心とたくましい体をもち、生涯にわたって自ら学び続ける生徒の育成」を教育目標とし、その手だてとして、「異学年交流型教科センター方式」によって学校運営を行っている。

本校の取組の特色として異学年縦割り集団活動（本校ではブロック活動と呼んでいる）がある。これは、学級を基盤としたブロック（縦）の活動と学年（横）の活動を組織的に展開するものである。これにより、全教職員で全生徒を育てる指導体制を確立するとともに、「人を大切にする心」を育成しようとしている。

研究委嘱を受けた今年度は、道徳教育の視点を組み込み、ブロック活動で生み出される、「仲間とともに創る学び・自治意識・自浄能力・豊かな心・規範意識」を高め、さらには自他の生命を尊重する心を育成することを目指した。

２　研究の方法

本校では、ブロック活動で生徒が「身に付けたい力」として、「ＡＴＴ」(Action：前に踏み出す力、Thinkin g ：考え抜く力、Teamwork：チームで働く力）と称する力を掲げている。

本研究では、ブロック活動で身に付けたい力を、道徳教育からのアプローチで更に定着を図る。そして、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、命を大切にする心や、他者の立場に立って考える力を育成する。また、その評価指標として、QUテストを活用し、生徒の向上的変容を確かめるとともに、改善の手だてを講じる資料として活用する。

３　研究の経過

５月８日(金)　QUテスト（１回目）
５月20日(水)　福祉実践教室
～22日(金)　　講師：SHIPおおぐちキャラバン隊
　　演題「みんな違ってみんないい」
６月12日(金)　授業研究Ⅰ
　　１年２組　資料「生命の選択」
　　講師：元公立小学校長
７月２日(木)　QU結果分析会
７月30日(木)　QUテスト学習会
　　講師：元公立小学校長　（同前）
10月９日(金)　いのちの学習講演会
10月16日(金)　QUテスト（２回目）
10月24日(土)　教育講演会　～戦後70年記念講演～
　　演題　「次世代へヒロシマの伝承を」
　　講師：原爆語りべ
11月５日(木)　授業研究Ⅱ
　　３年１組　資料「先輩たちの思いを受け継ぐ」
　　講師：本地区道徳教科指導員
11月17日(火)　QU結果分析会①
11月24日(火)　QU結果分析会②
１月21日(木)　授業研究Ⅲ
　　２年４組　資料「命の判断」
　　講師：元公立小学校長　（同前）

【福祉実践教室で体験活動をする生徒】

【教育講演会の様子】

【いのちの学習講演会での生徒の様子】

４　研究の実際

(1)　１年生　福祉実践教室「みんな違ってみんないい」

【福祉実践教室後の通級指導教室担当の授業】

道徳の時間を利用して、福祉実践教室を受講した。大口町のNPO団体「SHIPおおぐち」の方々に来ていただき、「障がいをもつこととはどういうことか」を、体験活動を交えながら教えていただいた。体験活動を通し、障がい者の方の立場に立って物事を考えることの大切さを知ることができた。

その後、福祉実践教室で学んだ「みんな違ってみんないい」という考え方を、生徒が学校生活に当てはめて考えることができるようにするために、通級指導教室担当や学級担任が話をする機会をつくった。このことで、生徒は、友達の立場を考えた言動をとることの大切さを知ることができた。

(2)　１年生　授業研究　道徳「生命の選択」

この授業ではモラルジレンマの資料を用い、シャム双生児の子をもつ親の立場に立ち、分離手術をするか否かを考えた。意見交流する時間を確保することで、生命について真剣に考えるとともに、多様な考えに触れ、命の尊さについての考えを深めた。難しい選択であったが、全ての生徒が自分なりの考えをもち、意見の交流をすることができた。

【自分の考えを友達に伝える生徒】

また、下記に示すワークシートの感想に見られるように、授業を通して多くの生徒が命の尊さについて考え、自他の命を大切にしようとする気持ちを高めることができた。

- 「命」というのは、とても大切なものなんだなあと、改めて感じました。今、私がここにいて、生きていられるのは「当たり前のこと」ではないので、これからは、命の重み、生きているという幸せをこれまで以上に大切にして生きていきたいです。
- 僕は今日、この授業を受けて、親はとても大変な決断だったと思う。僕は、何不自由ない生活をしているので、この命に感謝して生きていきたいと思う。
- 命について考え出したら無限に続いてきりがないと思いました。それほど命って大切なんだと思いました。

(3)　全学年　平和教育

①　全学年での道徳授業「サダコと原爆」

各学級で「平成26年度『平和の誓い』」や「サダコと原爆」（参照：広島平和記念資料館ＨＰ）を資料として道徳授業を行った。広島の原爆によって亡くなった佐々木貞子さんの12年の短い人生を通して原爆の被害を学んだ。

【千羽鶴を掲げる派遣生徒】

生徒は、戦争の被害者に共感し、平和の問題を自分のこととして考えることで、自他の生命を尊重していこうとする気持ちを高めていった。

サダコさんが入院中に折っていた折り鶴の話題に触れ、全校生徒で作成した折り鶴を千羽鶴にすることで、平和への願いへの気持ちを高めた。また、ここで作成された千羽鶴は、８月６日に広島平和記念式典に参列する本校代表生徒に託され、「原爆の子の像」にささげられた。

②　２年生　大口町平和祈念式への参加

２年生生徒全員が大口町で開催される平和祈念式への参加をしている。８月６日に広島の平和記念式典へ派遣された14名の生徒が報告をした。派遣生徒が広島で見てきたこと、被爆者からの話を聴いて伝えたいことなど実際に体験してきたことを報告することができた。生徒は、戦後70

年を節目に、戦争でたくさんの命が奪われてしまうことの悲惨さ、戦後日本の歩みについて考える機会となった。

③　全学年　教育講演会～戦後70年記念講演～

教育講演会に講師として、被爆体験者として語りべをされている方を迎え、「次世代へヒロシマの伝承を」をテーマに講演していただいた。講師は、17歳のときに爆心地から1.3ｋｍで被爆をしたが、奇跡的に生き残ることができた方である。原爆投下直後の広島の街の様子や、被爆した人たちの惨劇について、直接話を聴くことができる大変貴重な機会となった。

講師の方自身が、当時中学生だった妹を原爆によって命を失った話をすると、生徒たちは、自分たちと同年代の子どもも原爆によって命を失っていることを知ることで、命の尊さや、平和の大切さについて改めて考えることができた。

また、生徒たちは、戦争や原爆の悲惨さについて、次の世代まで語り継いでいく重要な使命を担っていることを実感した。

(4)　２年生　命の学習について

①　学級での道徳授業「命を見つめて」

【弁論大会の発表の様子を知る生徒】

骨肉腫で闘病生活を送った中学校２年生の猿渡瞳さんの弁論大会での原稿「命を見つめて」を資料とし、生徒はその全文を読み、更に弁論大会での様子のＤＶＤを視聴した。

猿渡さんの「本当の幸せって何だと思いますか。それは、『今、生きている』ということなんです」というメッセージは、生徒の心を強く揺さぶった。生徒は、「どんな困難にあっても、命さえあれば前に進んでいける」、「小さな悪に対しても決して許してはいけない」など、命がどれだけ尊いものであるかを痛感した。

②　いのちの学習講演会

助産師を講師として、「いのちについて考える～生命誕生、そしてつながり～」をテーマに話をしていただいた。講演では、講師の方が受精から誕生までの様子をスライドで提示しながら、生徒へ「皆さんが誕生して、今まで生きてこられたのは奇跡なんですよ」と呼び掛けた。生徒は、生命が誕生することが奇跡であり、すばらしく尊いものであると知ることができた。

また、大口町子育て団体連絡協議会の協力のもと、生徒が胎児の模型を抱く経験をしたり、産道から出産する疑似体験をしたりした。日常経験できない体験をすることで、生徒は自分を産んでくれた母親の苦労を知り、感謝の思いを抱くことができた。

③　養護教諭による道徳授業「命の大切さ」

養護教諭の協力の下、事前に保護者からの意見を集計したものを資料として授業を行った。養護教諭が、母親が280日間掛けて、おなかの中で赤ちゃんを育てたことや、家族が気を付けていたことを生徒に伝えることで、生徒は、自分が誕生するまでに家族がいかに最善の行動を尽くしていたかを知った。さらに、家族からのメッセージを伝えることで、生徒は、家族の自分へ対する深い愛情を感じることができた。最後に、「自分の命の大切さ」について考え、意見を交流した。

(5) ２年生　授業研究　道徳「命の判断」

【タブレットで資料を視聴する生徒】

資料「いのちの判断」（参照：NHK for School道徳ドキュメント）は、息子の脳死に直面した両親が、臓器を提供するかしないのかを決断する際の心の葛藤を考える内容のものである。

まず、「自分や大切な人が、臓器提供しないと助からない状況だったら、あなたは臓器提供を望むか」の問いに対して、70％近くの生徒が「臓器提供を望む」と回答した。

また、「生徒自身が臓器提供をしてもいいか」の問いに対しても、70％近くの生徒が「提供を希望してもいい」と回答した。生徒は臓器提供に対して、「他の人の命を救うことができる」、「他の人の役に立てる」などの認識をもっている生徒が多かった。臓器の提供する立場や提供される立場を考え、命の大切さや尊さについてじっくりと考えることができた。

【臓器提供について説明を聴く生徒】

次に、臓器提供をするには、「脳死の判定」と「家族の同意」の課題があることを生徒に知らせ、資料「いのちの判断」の動画を視聴した。臓器提供を望む息子に対して、両親が提供を悩む様子を見た生徒は、「脳死が人の死になるのか」、「心臓が動いていて、体が温かいのに死を認めてしまうのか」など苦悩する両親の気持ちを発表することができた。意見交流を通して、臓器提供に関わる生命の在り方について、いろいろな立場での考え方をもつことができた。

最後に、生徒自身に「自分が両親の立場だったら、自分の子どもの臓器を提供するか」という葛藤する問いを投げ掛けた。提供する方と提供される方、そして提供する方の家族の気持ちを考え、最終的な判断を迫っていくことで、「命の大切さ」や「命の重さ」、「生きること」など生徒は真剣に考えていくことができた。

(6)　全学年　「親子ふれあい広場」

【赤ちゃんをあやす生徒】

本校では、月に１度、大口町 NPO グループ主催による「親子ふれあい広場」が開かれる。地域の子育てママとその赤ちゃんが訪れ、様々な交流を行っている。生徒は、赤ちゃんをだっこしたり、あやしたりすることを通して命の尊さや重みを学んだり、母親の苦労を理解したりすることができた。

５　研究の成果

道徳の授業を始め総合的な学習の時間等を用いて、学級や学年で「命」について考えたことは、子どもたちの振り返りや感想を見ても、有効であったと考える。

また、２度の QU テストの結果を見て専門家からクラスの実態や改善するための具体的な方法について指導いただいたことは、道徳などの授業で指導計画を立てるときに大いに役立てることができた。

命の大切さを知るためには、他の立場に自分を置き換えて物事を考えることがとても重要であると考える。本実践では、そのために道徳の資料を読み友達の意見を聴き、葛藤することで、自分の考えを見つめ直すことができた。また、様々な立場の方から話を聴いたり、他者の疑似体験をしたりする機会を与えることで、更に、他の立場への理解を深めることができた。このことは、前述した本校が生徒に身に付けてほしい力（＝ ATT）の、特にチームで働く力を身に付けることに大きく貢献した。

今後も、こうした取組を年間指導計画に、意図的かつ系統的に組み込むことにより、生徒の「自他の生命を尊重する心」を少しずつ育てていきたい。